

地域振興に文化資源の活用を

民俗学者の小泉凡氏が講演



基調講演した小泉凡教授

塾長である小泉教授は「八雲はほとんど目が見えなかったから、身体全体で日本の本質を見抜いたのだろう」と述べ、まちの魅力は五感を使って発見されることなどを強調した。

最近八雲とアートが結び付いた新しい展開も進んでおり、「GNPが国の豊かさを表すバロメーターになっているが、物が豊かな社会が幸福をもたらすとは限らない。これからはいかに心豊かに生きるかの時代になる」と小泉教授。無形文化や芸術を視野に入れた着地型観光の創出を求めていた。

まちづくりNPOげんき宮城研究所の創立5年とみちのく八雲会の創立10周年を記念したフォーラムin石巻が1日、石巻市駅前北通りのナリサワ会議室で開かれた。

「耳なし芳一」「雪女」などの「怪談」で知られる小泉八雲(ラファディオ・ハーン)のひ孫で、民俗学者で島根県立大学短期大学部の小泉凡教授が基調講演し、地域に眠る文化資源を掘り起こして観光やまちづくりに生かす必要性を説いた。

小泉教授は「GNPからGNEの時代へ」文化資源としての小泉八雲を考へる」と題して講演した。松江市では地域振興の文化資源として、翻訳や映画化で広まった八雲の「怪談」の世界に着目。平成20年から始めた「松江ゴーストツアー」が人気を集めているという。

八雲没後100周年の平成16年には、五感体験で想像力を高める子ども塾が開講。その

AMI(津波)の言葉が海外に最初に伝えられた人物といわれ、「稲むらの火」は大津波から村人を守った先人の話として世界的に評価されている。